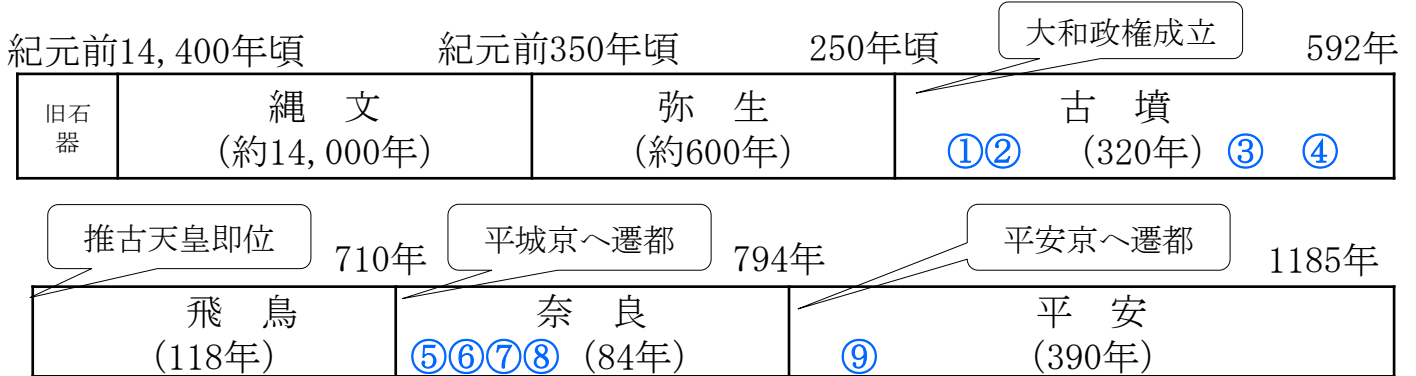


# 能登の王が眠る「雨の宮古墳」と皇子が眠る「親王塚古墳」 及び能登山岳信仰の霊場「石動山山麓」の歴史遺産へ！

## 【行程】

小坂公民館⇒⇒⇒雨の宮古墳群⇒⇒⇒<昼食・道の駅織姫の里なかのの>⇒⇒⇒ ⇒⇒⇒⇒  
石動山(資料館・大宮坊・伊須流岐比古神社など)⇒⇒⇒⇒小田中親王塚古墳(第10代崇神天皇の皇子大入杵命墓)・亀塚古墳⇒⇒⇒⇒小坂公民館(16時30分頃着)



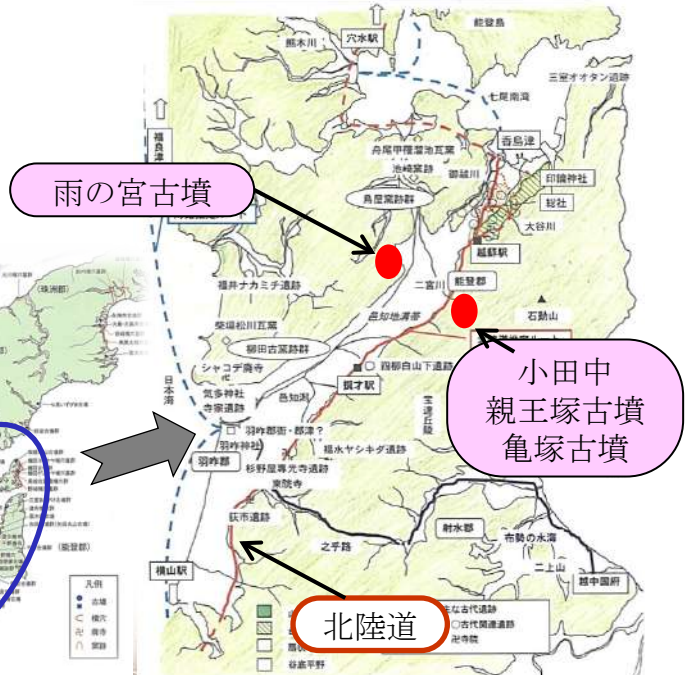
- ① 4世紀中頃～5世紀初 雨の宮古墳築造
- ② 4世紀後半～末期 小田中親王塚古墳築造
- ③ 520年 継体天皇が越国の総鎮守として賀茂別雷神を御所村へ遷座
- ④ 570年 道君が高句麗からの使者に大王(おおきみ)と偽り貢ぎ物を横領
- ⑤ 717年 泰澄大師が白山・石動山を開山
- ⑥ 718年 越前国から分立し能登国立国
- ⑦ 746年 大伴家持が越中国国司に任命
- ⑧ 748年 大伴家持が能登半島を巡回
- ⑨ 823年 越前国から分立し加賀国立国

## ==雨の宮古墳群==

眉丈山(標高188メートル)の山頂を中心に、4世紀の中頃から5世紀の初めにかけて造られた36基の古墳から成っています。1号墳は、墳丘の長さが64mの**前方後方墳**としては県内最大規模を誇っています。2号墳は、墳丘の長さが約65.5mの**前方後円墳**です。

これら2つの古墳に埋葬されている人物は、**能登全体に支配権を持つ権力者**であったと推測されます。

## 能登国(邑知地溝帯周辺)の古代遺跡



雨の宮古墳 1号墳



## === 小田中親王塚古墳 ===

古墳時代前期にヤマト政権と手を結び、邑知瀨地溝帯東縁を支配していた首長の墓で、明治8年に第10代崇神天皇(すじん)の皇子・大入杵命(おおいきのみこと)の墳墓と治定(じじょう)され、宮内庁により管理されている。

- ①築造年代⇒4世紀後半～末期
- ②埋葬者⇒大入杵命墓(第10代崇神天皇の皇子)
- ③墳形⇒円墳(帆立貝形との説もある。)
- ④墳丘・石室⇒三段築盛で竪穴式石室(幅1.5m、長さ3.0m)
- ⑤墳丘の直径・高さ⇒直径65m(空濠含90m)、高さ14m
- ⑥出土品⇒三角縁波紋帯三神三獸鏡(直径 21.2cm～21.4cm) 重さ827g  
管玉1点、鋏形石破片1点



『平家物語』巻7には、寿永2年(1183)「木曾義仲殿は、志保の山打ちこえて、能登の小田中、新王の塚の前にぞ陣をとる」とあり、古くから知られた古墳になる。

## === 亀塚古墳 ===

実際の被葬者は明らかでないが、宮内庁により「大入杵命墓」の陪塚(注)に治定されている。

- ①築造年代⇒4世紀後半
- ②墳形⇒前方後方墳
- ③墳長⇒62m(後方部36.6m、前方部25.4m) 墳丘の高さ⇒8.4m
- ④出土品⇒伝承なし

(注)陪塚とは、大型の古墳と同一の時代に、その周囲に計画的に付随するように築造されたものを指し、中心となる大型の古墳に埋葬された首長の親族、臣下を埋葬するもののほか、大型の古墳の埋葬者のための副葬品を納めるために築造されたものもあって考えられている。

## ===能登の山岳信仰の霊場===

### ～「神々の御坐す石動山」～



大宮坊・御成門

中能登町の東方に連なる標高564mの石動山。その山系の谷間からは、しばしば霧が立ち込め、あたかも神々が宿るかのような幻想的な風景を見せる。

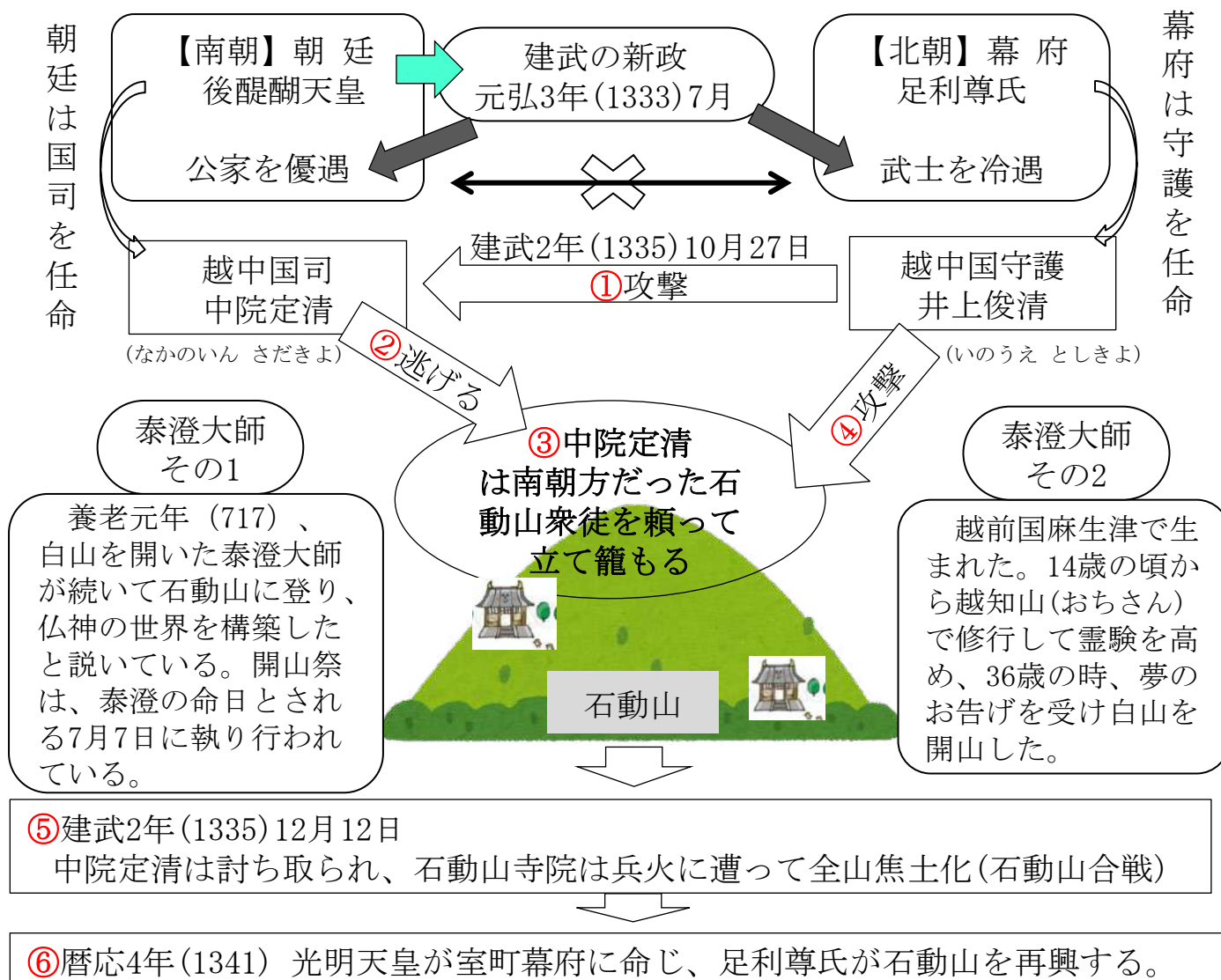
石動山の名は、天より「**動字石**」(どうじいし)が落下して、全山が震動したことに由来するという。古より沖を行き交う船人たちは、**航海神**あるいは**漁労神**として崇め、山系から流れ出る河川が能登最大の穀倉地帯である邑知平野を潤すことから、**農耕神**として信仰を集めた。 (おうち)

6世紀中頃、日本に仏教が伝来し、奈良時代以降、神が宿る全国の山々は、仏と融合しながら神仏習合の形態で発展した。平安時代より**伊須流岐比古神社**(いするぎひこ)の存在が確認できる石動山も、鎌倉時代には寺院が建立され、**大宮坊を中心に360余りの坊舎と宗徒(僧侶)3,000人**を擁していた。

寺院群は総じて**石動寺(後の石動山天平寺)**と呼ばれた。山内には**五社権現**が成立し、神仏習合の世界をつくりだしていった。

しかし、二度の動乱で焼き討ちに遭い「能登の比叡山」とも言われた。

## ===石動山の動乱と炎(その1)===



# ===石動山の動乱と炎(その2)===

⑨天正5年(1577)9月  
上杉方の鱒坂長実が七尾城へ入城  
あじさかながさね

⑬天正9年(1581)3月  
信長は、菅屋長頼を七尾城代として派遣する。

⑭天正9年(1581)8月  
前田利家が信長より能登一国を与えられ七尾城へ入城

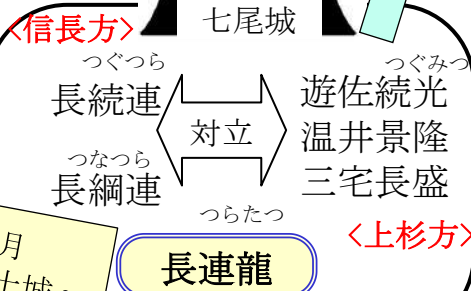
⑮天正11年(1583)6月  
前田利家金沢城へ入城

織田信長

⑯天正5年(1577)8月  
援軍要請のため安土城へ

①11代城主畠山義隆  
天正4年(1576)2月  
毒殺される。  
幼少の春王丸城主に

②天正5年(1577)7月  
疫病で死去(5歳)



③天正5年(1577)9月15日 遊佐は、これ以上の交戦は無理と降伏し、信長派の長統連・綱連ら一族100余人を討ち取り、城を開門して上杉軍を招き入れ七尾城は陥落し、169年間続いた能登畠山氏は滅亡した。そして、上杉氏による能登支配となる。

④天正4年(1576)11月  
能登へ侵攻七尾城包囲

⑤天正5年(1577)3月  
謙信春日山城へ帰る

⑥天正5年(1577)閏7月  
再度、能登へ侵攻し七尾城を囲む

上杉謙信

⑦天正4年(1576)12月  
石動山城を築く

⑧天正6年(1578)3月  
上杉謙信急死 49歳

⑨天正7年(1579)8月  
遊佐・温井らは、七尾城から⑩の上杉方鱒坂長実を追放し畠山旧家臣の合議体制とする。

⑩天正5年(1577)9月  
長連龍は、落城を知らないまま、柴田勝家・羽柴秀吉ら4万の援軍を先導し七尾へ向かって松任まで進軍しが「手取川の合戦」で敗れ撤退する。  
⑪長連龍は、松任倉部浜で、兄をはじめ一族の晒し首を見て悲し涙を流し、上杉方に内応した遊佐・温井・三宅に対する復讐の念に燃え、海路能登へ向かった。

対峙



⑫天正10年(1582)6月  
信長自害したことで、温井・三宅は上杉の支援を得て能登奪還を目指すため、石動山衆徒や上杉方の残党らがいる石動山・荒山に立て籠もる。  
⑬6月25日 長連龍・前田利家・佐久間盛政は、石動山・荒山に攻め込み温井・三宅らを討ち取って伽藍に放火し、360余坊あった寺院群が再び廃虚となった。

⑭天正8年(1580)5月~6月  
長連龍は、遊佐・温井・三宅に対する復讐のため菱脇(現羽咋市)を中心に戦いを展開し勝利する。  
⑮遊佐・温井・三宅は、使者を信長の許に派遣し、降伏と七尾城の明け渡しを願い出る。

長連龍  
前田利家  
佐久間盛政

⑯攻撃

⑰天正8年(1580)9月  
長連龍は、信長から鹿島郡西半分を与えられる。(3万1千石)

⑱天正9年(1581)3月  
長連龍は遊佐一族を成敗。身の危険を感じた温井・三宅は越後へ逃げる。

⑲天正10年(1582)6月2日  
信長、本能寺で自害

⑳天正11年(1583年)  
朝廷は石動山天平寺の再興を羽柴秀吉に命じ、前田利家は大工の手配・コメの寄進・宗呂の帰還を許すなど尽力した。承応2年(1668)に前田利常は石動山本社(現在の本殿)を建立している。

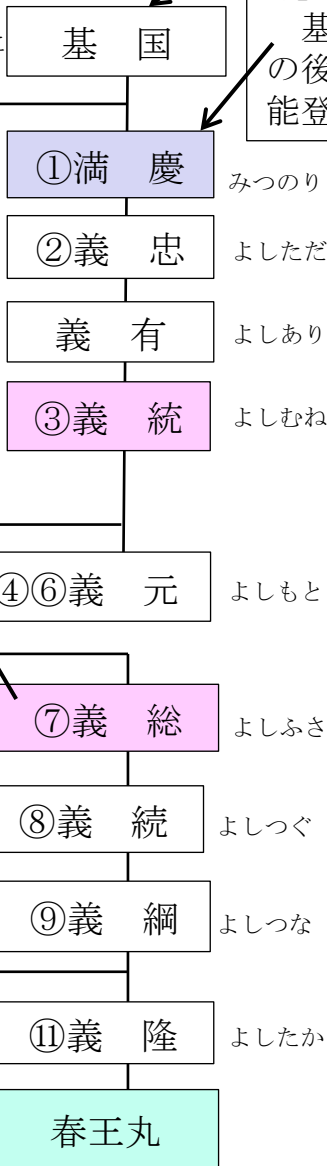
# < 参考資料 >

## 【能登畠山氏略系図】



足利二つ引

もとくに

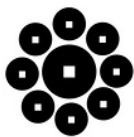
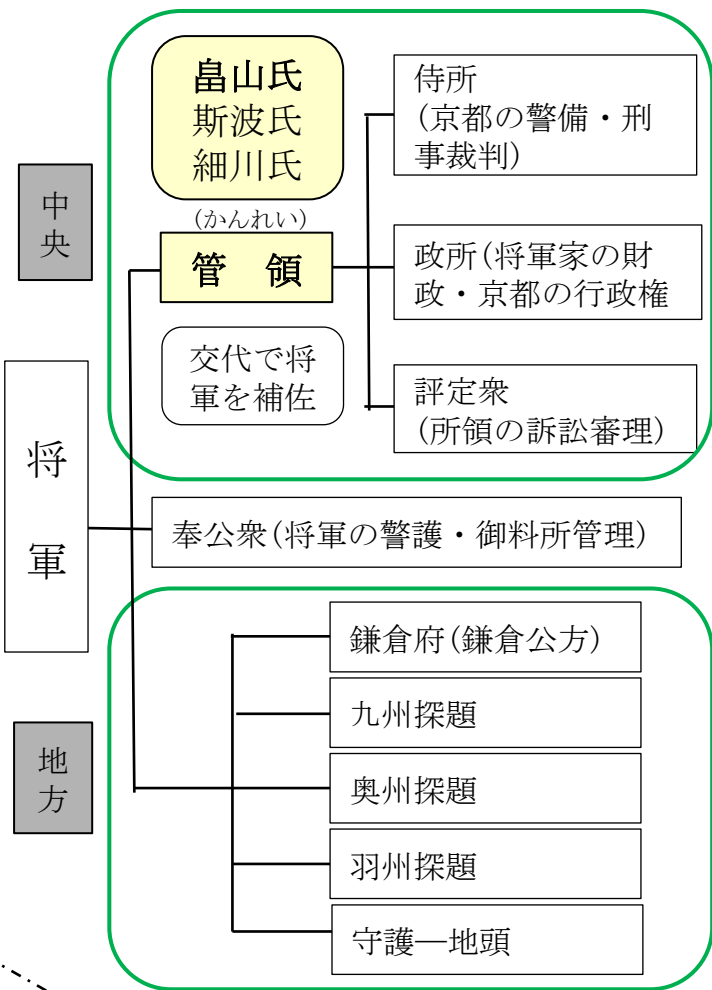


< 明徳2年(1391) > もとくに  
足利一門の有力家臣であった畠山基国が能登・河内・越中・紀伊の四ヶ国の守護職に任じられる。  
< 応永15年(1408) >  
基国死後、満慶が管領畠山家の家督を継ぎ、その後、兄満家に家督を譲って、改めて兄満家より能登国をもらい受け「能登畠山家」を創設する。

義総の代は全盛期で、茶人・円山梅雪が茶の湯文化を広めた。また、冷泉為広も連歌会に七尾へ来ている。

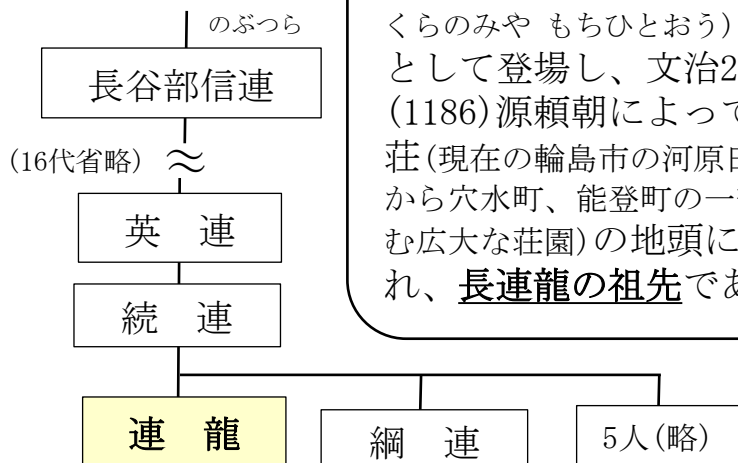
家臣らは義総を隠居させ「畠山七人衆」という集団を作って領国支配の実権を握った。

## 【室町幕府の機構】



錢九曜

## 【長氏略系図】



長谷部信連は、「平家物語」に、高倉宮以仁王(たかくらのみやもちひとおう)の側近として登場し、文治2年(1186)源頼朝によって大屋荘(現在の輪島市の河原田川流域から穴水町、能登町の一部を含む広大な荘園)の地頭に任命され、**長連龍の祖先**である。

## 【長連龍のその後】

- 賤ヶ岳の戦いで殿
- 末森城の戦い
- 浅井暁の戦いで殿
- 嫡男・好連は利家の8女(福高源院)を正室に迎える。
- 元和5年(1619)2月 田鶴浜で死去(享年74歳)
- 長家4代当主 尚連 加賀八家(3万3千石)